

『イギリスにおける労働者階級の状態』に学ぶ

第2回 関東ブロック

解説・背景・意義 そのⅡ

司会：先月号では、本テキストを学ぶ「5つの柱」とは何か、革命とは何かについて学習してきました。

今月号は、労働者が階級として意識する条件ともなった、自らの置かれている状態を考えることから始まります。彼らは、階級としての固有の見方・観念、さらには「抑圧されているという意識」が生まれ、社会的・政治的な関与の重要性を認識するようになります。そして、ブルジョアジーの搾取に対抗するべく、プロレタリアートは労働組合を結成し、労働者としての権利を獲得していく過程についてレポートして

もらいます。

プロレタリアの反抗

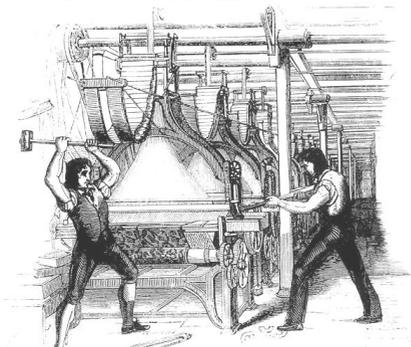
矢島：産業革命が工業の諸部門へと次々に波及していくにつれ、その人数と力が大きくなっていきます。1824年イギリス国会では労働者の大衆運動によって、労働者の団結を禁止する法律を廃止しました。しかし、資本の側は手をゆるめません。翌年の1825年の国会では、組合法あるいは労働者の団結に関する法律を採択したのです。その内容は労働組合の活動を極度に制限するもので、組合に加入する、

ストに参加するように労働者の間で扇動することが、「強制」であり「暴力」であるときれ、刑事犯罪として罰せられるとされているのです。

しかし、1832年最初の労働者党チャーティストが結成され、6項目の要求を定式化した「人民憲章」を発表します。そして、その採択を要求する請願書を国会に提出しました。しかし、その請願は1839年と1842年と1849年に国会で却下されてしまいました。

人民憲章での「選挙権獲得」は1867年第一次選挙法改正で、小作人は

◆みんなの学習講座



ラッドライト運動は、1811年から1817年頃、イギリス中・北部の織物工業地帯に起こった機械破壊運動である

年額12ポンド・スターリング、都市では家屋所有者と1年以上同じ場所に居住し、10ポンド・スターリング借家料を支払っている借家人が男子プロレタリアとして初めて選挙権を得たのです。

女性が初めて選挙権を得られたのは、1918年の「人民代表法」で21歳以上の男子と合わせて、30歳以上の

女性で彼女自身が所帯主か、所帯主の妻か、彼女自身が家屋の所有者か、大卒を卒業しているか等の条件が附せられていました。

労働組合は、1833年10月にロバート・オウエンによる全国労働組合大連合が結成されましたが、1834年8月に解体されるなど、1年しか持ちませんでした。

労働者・労働組合を作り上げる

この本を読んで資本家から労働者に対して、過酷な労働が強制されていることに驚きを感じました。特に労働時間と、労働者の年齢です。

エンゲルスが、一冊の「罪業記録簿」を作って、「イングランドのブルジョアジーを全世界の前に告発する。」と言った気持は良くわかりました。思わず「そっだ」と叫びました。

この労働時間は、イギリス最初の労働者党チャーティストと労働組合の闘

いで、1833年に工場法が制定されましたが、労働時間には不十分であり、1847年に改正され10時間労働法が制定されたのです。まさに、イギリスの労働者とチャーティストが一体となった成果であり現代にも通じるものがあると思います。

国会・ありがとうございました。プロレタリアートは、自分達の労働環境や生活環境に対して意識を強め、やがてブルジョアジーに対する労働者運動へと発展していくことですね。

闘いの芽生え

労働者の団結、大衆運動

荒畑・19世紀イギリスの国会で労働者の大衆運動によって団結禁止法を廃止したとある。この最初の頃の労働者の大衆運動はどういう風に作られてきたのか、確かに長時間労働はさせられるし、女性だって大変な働かされ方をしていたし、産後何日もしないうちに

工場に行かなければならない。麻薬を使つて働かせられるような状態。自然的な発生はあつたと思ふんですね。でもこの時代、労働者の大衆運動の芽生えとはどういうものでしょうか。詳しくくわかれたい。

矢島…芽生えですか。労働者が怒りを持ったのは事実なんです。不況が起きた、失業・解雇で生きていけない。乞食をするしかない。そういう状態の時に怒りを持った。その怒りを何にぶつけたか。ひとつは泥棒ですよ。それから火をつける。これは私が担当した農業労働者のところにあつて、小作人が火をつけて回るんです。大農場主の倉庫にね。これは芽生えだね。ところがこれは個人的で組織的ではない。だんだんと発展していくわけですよ。暴動として現れたり、ストライキとして出てきたりする。組合を作つて長期ストライキをやると収入がないので、組合費を徴収して手当みたいなものを組合

が払う。そういう風なことが書いてある。

三宅…労働組合がどういふ風に出てきたのかということが書いてある。イギリスの居酒屋で労働者というか、徒弟がビール飲みながら、誰々さんが怪我したからカンパしようという話し合いができて、それが労働組合という組織の発端になるというのがあつた。労働者の集まりが生まれてくる中で不満も出てきて、そして団結が生まれてくる。そういう成長がチャーティスト運動とかちよつと過激になるとラッドイト運動とかになつてくる。そういう経過の中で団結禁止法もつくられていった。労働者の発展とともに、そこから、自然発生的に団結して闘う組織が労働組合という形で作られていった。そこから、労働者の反抗、大衆運動ができていったのではないか。

矢島…労働者は享楽を二つ求めた。一つはお酒、その日の賃金を一晩で使つ

てしまふ。もう一つは性交ですよ。強姦・売春・乱れた性交。この二つが労働者の堕落だつたんです。よく労働運動は酒場からなんて私の若い頃は言われました。そうだそうだと言いました。が笑、それはちよつと違うんじゃないかなと思ふんですね。堕落もし暴動とかやつてるうちに、組織的に団結しようという認識が労働者の中に出てくるんですね。

三宅…労働者は団結することに気づくんだよ。

勝田…『未来を花束にして』という映画を見た。この映画はチャーティスト運動当時が舞台。当時女の人が働き手で男が使われない。手先の器用な女の人が使われ、酷使された。工場主に強姦される人もいた。ある集会で主人公が、自分の工場の実態を話す場面がありました。そういう中で抵抗の芽がつくられたのではないかと、あの映画を見たときに思いました。

◆みんなの学習講座

司会：さて、労働組合の話も出てきました。労働者階級は団結して資本家階級と闘うことになるわけです。

そこで「階級とはなにか」について考えてみたいと思います。誰か説明・解説していただけますか。

階級とは何か

矢島：一言で言えと言われても難しいよね。社会を構成する集団層かな。

勝田：搾取するものとされるもの。

荒畑：生産手段を持つているものと持たざる者。

岡本：資本家と労働者。

小林：だからその階級がなぞ出てきたのかという事なんだけど、産業革命による生産手段の発展の中で、そこから辺から食い詰めて都市部に流れて労働者になっていくのと、新しい生産手段を持つて労働者を雇うものが出てくる。労働者になる側と労働者を雇う側に分かれてきて、それが階級という言葉で

言い表されるようになったのかなあ。

三宅：階級とは、生産手段を持つているものと持つていないもので別けられる社会の中の集団・階層という捉え方だいいと思うんだよね。

勝田：いや生産手段というと封建社会の農奴も生産手段を持つていたでしょ。階級とは搾取するものとされるものというふうには私は思うんだよね。搾取されていらない時代には階級はなかった。人間労働を搾取することが始まって階級が現れた。

三宅：生産手段を持つているか持つていないかによって搾取、被搾取が出てくるんだよ。

矢島：原始共産主義社会は共同生活だから搾取はなかったんですよ。でもその中で一定の生産物が分配に必要分よりもどんどん増えてきた。剰余生産物が出てきて、この余つてきたやつを好き勝手に使うやつが出てきた。私有財産を持つものが出てきた。族長とか部

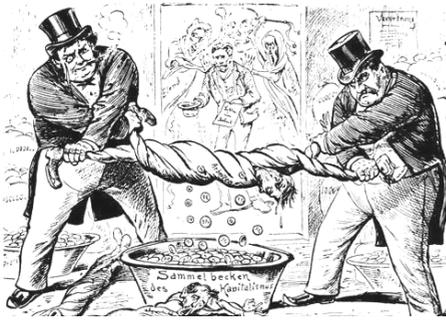
落長とか神様の使いという一定の力を持つた人たちが出てきて、剰余生産物を私物化し権力を持つ者が出てくる。

そこに生産手段の発展というのが結びついて、搾取するものとされるものというのが生まれてきたという形になるんだろうと思うんだよね。

『イギリスにおける労働者階級の状態』を学ぶ上では、単なる生産手段の発展だけに目を向けるんじゃないで、そこに搾取するものとされる者の階級闘争があるということをとらえることが大事だと思。

三宅：だから生産手段をどちらが持つているかというところで、階級は分かれるのではないかと俺は思うんだよ。そこに結果として搾取、被搾取の関係が出てくる。

勝田：いや逆だと思。人の労働を搾取するということが階級が生まれる原因。搾取されているから階級闘争をする根拠がある。私たちが労働者階級だ



19世紀初頭のイギリスは、資本家が労働者から過剰に搾取することを規制する法律がなかったため、資本家の搾取はやりたいた放題の状況だった

ということを自覚することこそが、この『イギリスにおける労働者階級の状態』を学ぶ意義だと思うんですね。
土沢：中小企業の経営者というのはどつちに入るんですか？

宮沢：資本家階級でしょう。

三宅：小ブルジョア、プチブルでしょう。階級関係でいうと、ブルジョアになるでしょう。生産手段を持っているんだもん。

荒畑：中小企業の経営者も労働者を雇うわけですよ。そしたらブルジョア階級でしょう。

宮沢：資本の集中という言葉があるけど、中小企業の経営者はどうなるの。

小林：中小の経営者も競争に負ければ労働者に転落する。小ブルジョア的な思想はあるけれども全てを失って労働者になるしかないってわけだ。

土沢：資本集中は法則だと言ってますね。

司会：資本の集中については次の機会にして階級についてはわかりましたか。

整理すると、階級とは社会における経済的利害地位等を同じくする集団という位置づけですね。その社会の生産手段を所有し他人の剰余労働を搾取する集団か、生産手段を所有せずその所有者に剰余労働を提供するしかない集団に分かれる。奴隷制社会では奴隷主と奴隷、封建制社会では領主と農奴、今日の資本主義社会では資本家と労働

者がそれぞれの基本的な階級である。

資本主義社会では二大階級になっていく。討論の中で、生産手段を持っているものを持つていないもの。あるいは搾取するものと搾取されるものというのがありましたね。結局、生産手段を所有し他人の剰余労働を搾取する側と、生産手段を所有せず剰余労働を搾取される側と整理できますね。

階級の捉え方は、この『イギリスにおける労働者階級の状態』を学ぶ上で非常に重要になります。さつき勝田さんが言いましたが、「なぜこのテキストを学習するのか」「われわれはどういう階級にあるのか自覚せよ」ということが大事だと思います。

さて、最後に矢島さんから大切なレポートが出されています。

もう一つの大きな発見

矢島：産業革命はエンゲルスによれば、「労働者に対して、物事を考え、人間

◆みんなの学習講座

的地位を求めるように促すことを発見した」とある。産業革命は、生産手段の発展・発明によって、それまでの「手工業」「家内工業」から、「工場制工業」「大工場制工業」へと発展したことで、中小ブルジョアを駆逐し、少数の大資本が中心に大多数の労働者を搾取する、資本主義国家の発展を促したものと理解されています。

しかし、それだけではない。エンゲルスはもう一つの大きな発見をしました。「産業革命がプロレタリアの誕生とその将来の人的地位の向上を促す」と労働者にエールを送ったのです。そして、エンゲルスはそういう産業革命であるから、逆にいえば「産業革命は彼らに対して、物事を考え、人間的地位を求めるように促した」と言っているのです。エンゲルスはフランスの革命に労働者が大きな働きをしたことを知り、イギリスにおいても産業革命でブルジョアが労働者を人間以下で

労働させている実態を見て、労働者が人間として扱うよう立ち上がる力があることを予見したのです。

これこそ、史的唯物論、社会主義理論ではなかるうか。エンゲルスは、産業革命が生産力の発展につながった進歩論だけではなく、階級闘争の必然性を明らかにしました。

現代も人間的地位を求める

労働者の使命は変わらない

三池で闘い続けた人が、「俺たちは死ぬまで労働者、バイ！」と言って三池闘争を闘い抜き「総資本対総労働の闘い」と言われました。私たちが日ごろから「労働者は社会の主人公」と言っています。

しかし、グローバル大企業の内部留保金が約516兆円を越す過去最高の利益を得る一方で、低賃金に抑えられ炊き出しの列に並び、いきなりの雇い止めで社宅を放り出され、パワハラに

より遠隔地に強制配転させられ、コロナ感染拡大を理由に解雇されている数々の現実、1765年からの産業革命が労働者を完全にたんなる機械としてしまったように、現在も会社に物言わぬロボットにされてしまったのではないのでしょうか。

まさに現代も、あの第一次産業革命当時の普遍的な人間の利害への無感覚の中に埋没している最後の階級、労働者へ「人間的地位を求めるように促している」と言えるのではないのでしょうか。

司会：はいありますがどうございました。以上で「解説・背景・意義」を終わります。

来月号からはテキスト本文の学習に入ります。「序説」と「工業プロレタリアート」です。産業革命を掘り下げていくとともに、そこから生まれた工業プロレタリアートを分析します。